

巨根シヨタ忍者を襲うのは女たちの金的、金的！
そしてお姉さまや熟女の逆レイプ！

『金的忍法帖』



玉子王子 著



「迅雷、おめでとう」

浴衣のような着物を着た幼い少年、迅雷の前に立つのは銀髪の美少女、ではない。

見た目は美少女で女の格好だが、迅雷の兄、疾風だ。

この山間にある忍びの集落、うさぎ隠れの里で天才と称えられ、最年少で上忍となった男。

「最年少中忍なんてすごいじゃないの」

しゃべり方もしっかり女だ。特別な趣味があるわけではないと迅雷は知っている。

女の格好をしていたほうが有利だからそうしている、それも忍術である。

といっても、誰でもやれるわけではない、華奢で整った顔立ちでなければならない。

忍びとして厳しい鍛錬など積んでいたら女でもがちりしてしまう、ましてや男では。

女の格好をしたほうが有利かも、と思っても、結局のところ実行できたのは里では疾風だけだった。

若手の中では最強と言われている兄が見た目は美少女というのは不思議な感じだった。

里の幹部にはくノーが多く、それに媚びて兄が出世したというものもいる。

いや、いた。

今はない。そういうものはくノーらに絡まれ、叩きのめされて黙らされて行ったのだ。

戦うと、大体勝つのはくノーだ。強いといえるのは男の忍者のほうだが、くノーには男にはない必殺の技がある。

というより、くノーに対しては使えない技、というべきか。

「早速だけど、お頭が呼んでるわよ。多分、初任務ね」

疾風の声は女そのもの。

迅雷も女というか子供の声だが、それは年齢による。いずれ男の声になるだろう。

しかし疾風のほうは年齢的にはとくに男の声のはずなのに、女の声である。

訓練と、もともと声質が女に近かったということだろう。

任務で外に出て、他の忍びと戦ってもまず男だとばれない。

うさぎ隠れの里にはいくつか大きな屋敷がある。

多くが、代々上忍やお頭を出してきた家のもので、いくつかは新たに上忍となって頭に与えられたものもある。

迅雷たちの父親も上忍であり、世話役という幹部なので屋敷をもらっている。

両親は遠くの国に潜入して留守だ。里の住人の半分ぐらいはそうやって外に出ている。

ともかく、迅雷は大きな屋敷の一つに向かう。

目立つところは全くない、むしろ目立たない。

屋敷は乱雑に建っているように見えるが、実は中央部のいくつかの屋敷を外から隠すように巧妙に建てられている。

その外から見えない屋敷のどれかに里の頭がいる。

その日によっている屋敷が違う。あまり必要ない気がする用心深さ。

屋敷に近づくと、ごく普通の農民の格好をした男が近づいてくる。

「三の屋敷だ」

言われて、その屋敷に向かう。

屋敷に入り、裏口から出る。その前に、普通の農民の格好をした女が声をかける。

「おめでとう迅雷ちゃん。中忍になったんだって？ それで今日は初任務受けるってわけね。四の屋敷よ」

頭を撫でてくる女。浮雲というくノ一。三〇ほどでまだ若いのが、迅雷から見れば三倍ほども年を食っていることになる。

それでももう同じ中忍だ。

見上げ、胸の大きさに気づいた顔を赤らめる迅雷。

くノ一である、そういう視線には目ざとい。若い男に——というか若すぎるが——そういう目で見られるのは、容色が衰えてきたことを感じている彼女にとって心地よかった。

目をそらした迅雷に、頬を緩めて語り掛ける。

「あら……どこ見てるの？」

「て、天井。はうっ」

太腿にくノ一の手が伸びる。す、と慣れた動きでそれが撫であがり、つま先立ちの迅雷の股の間を持ち上げる。

「もう迅雷ちゃんもスケベなこと考える年なのね」

「ち、ちが……おふっ」

キュ、とくノ一の手が男の鍛えようがない部分を握る。

「うふふ、嘘つく男の子は、くノ一の技で女の子にしちゃうわよ？」

——って、あら？ この子……うっそ。

唾を飲み、グニグニと三分の一の年齢の少年の男の肉を揉む。

——すごいボリュームね！

ここは戦国時代の日本ような世界だが、実際にはそれらしいファンタジーな世界である。南蛮人も発展した土地では多少はうろついており、彼らの言葉もいくらか広がっている。

情報に敏感な忍びたちならなおさらそういう言葉を使う。

「ちょ……おばさん……おぐっ」

「こらっ！ 誰がおばさんよ！ 怒っちゃうぞ！」

ふざけているが、半ば本気で怒って急所を握る手に力を込めていた。

「ほおおお」

男の命を圧迫され、つま先立ちになるしかない迅雷。別につま先立ちになっても全く救われないが、そうしないではいられなかった。

——あは、玉握られた男ってなんでつま先立ちになるの？ 蹴られたらまあ、わかるけど。ちょっとでも上に、ってことだもんね。でも握り潰しには意味ないじゃない？ 本当、ここ責められた男の反応って見てて飽きないわ。

「うふふ、やられっぱなしじゃだめよ？ 迅雷ちゃんもやり返さない」と

「や、やり返すって……」

顔を赤くして見上げてくる迅雷に、ぞくりとするくノ一。

——か、かわいいわね……このまま金ちゃん握り潰してあげたい……霊薬あるからすぐ治るし……

法力や妖術が実在し、妖怪もいるこの世界。どんな傷でも一瞬で治す霊薬も寺や神社、町の薬屋で買うことができる。

このうさぎ隠れの里でも仕事柄多く必要なので、法力を身につけた専属の忍びが継続的に生産している。

そういう背景はともかく、くノ一が持っている霊薬を飲ませれば睾丸どころか、首が飛んでも平気だ。霊薬を飲んだ人間が刀で首を飛ばされた場合、すぐに首が飛んで戻ってきて胴体に引っ付く。

よく言えばア○パンマンの新しい顔が飛んでくるような光景だが、悪く言えばホラーでしかない。

ペロリ、と唇をなめるくノ一。

——いいよね、治るんだからキャン玉潰し。って、まあこの流れで潰すのはさすがにかわいそうかな？ 少しは。

少しで済むのか、と迅雷が聞いていれば今以上に股間を縮みあがらせてだろう。

「うふふ、迅雷ちゃん、手かして」

空いた手で、ただ垂れ下がったショタ忍者の手を取り、自分の股間にあてがう。

「あっ」

「うふふ、基本、追い詰められたら相手が使ってる技を真似するのがいいよの。迅雷ちゃんもそうしなさい」

言われて、顔を真っ赤にする迅雷。

「で、でも……」

「ん？ 何かな？」

「おば……おぐうう！」

「去勢忍法玉潰し！」

ぎゅうううううう、とかなり思いきりショタ忍の睾丸を潰しに行くくノ一。もちろんそんな忍法などはない、ただの金握り潰しである——まあ並みの忍術よりよっぽど男にとっては恐ろしい技だが。

「おばおおおお！」

「おばって何よ！？ お姉さんに向かって何言う気？ キ○タマ潰れろ、キ○タマ潰れろ！」

つま先立ち膝を締め、身動き取れないショタ忍者。

かなり本気で怒っている大人げなくノ一。

それでも、最後の一线、潰れる前に緩める。

ほお、吐息をつくショタ忍者。ふわ、と全身から汗が噴き出すが、休んでいてまた握られてはたまらない、必死で話し始める。

「は、はひいい、そ、その、お姉さん、お姉さんですけど」

「そう、お姉さん」

「お姉さん、その……タマタマないから」

言われると、ニヤア、と心底楽しそうな笑みを浮かべるくノ一。

「あらっ！ そうだったわね！ 女の子にはタマタマがないから、同じ反撃はできないんだったわね！ タマタマが、ないからねえ！ うふふ、じゃあ女の子は一方的に、男の子の大事なものを握り潰せちゃうね」

優越感に満ちた目でショタ忍を文字通り見下ろすくノ一。

顔を赤らめ、唇をかむ迅雷。

——なんだよこのおばちゃん……玉がないのがいいことみたいに……いいわけないだろ。

唇をかみつつも、下手なことを言って金握りに力が入っては困るので黙っているショタ忍。

きゅ、きゅ、とリズムカルにショタ忍の陰囊を握りしめ、緩めるくノ一。

「ほう、やめ……」

「っていうか……迅雷ちゃん……ここ大きいわねえ」

「え、そ、そんなことないよ」

「ああああ。嘘嘘、明らかに特大よ？ ううふ、さすが疾風ちゃんの弟ね……巨根ふたなりの」

ふたなりというか女装子という気もするが、とりあえず迅雷はそれどころではなかった。

——このままじゃまたいつ握り潰されるかわからない。それなら……

「はっ！」

突如、手を合わせる迅雷。

ボン、と煙が上がるとガランとその場に丸太が転がる。丸太といっても肩幅ぐらいだ。

目を見張るくノ一。

「おおっ！ やるわね！ 金ちゃん握られながら変わり身の術なんて」

——うちの旦那なら無理だわ、今の体勢になったらもう、キ〇タマ握り潰されちゃう。

「っていうかあの子、絶対うちの旦那よりでっかいわ」

にぎにぎと、手の中に残った肉の感触を確かめるくノ一。

変わり身の術で少し離れた場所に瞬間移動——素早く移動したとかではなく、本当に瞬間移動である。忍術もある種、法力の類なのだ——した迅雷は、その場に転がる。

三の屋敷の勝手口のすぐ外の壁の脇である。が、仮に便所の中だろうが、気にせず転がっただろう。

「おぐうううっ」

股間を抑える。

くノ一は割と冗談めかし睾丸を握ってきた。

実際、冗談のつもりだったのだろうが、それは睾丸を持たないものの感覚による冗談だった。

限りなく男性経験を積み、くノ一として睾丸を握り潰しもしてある意味迅雷などよりよほどその専門家のような経歴のくノ一であったが、所詮は自分はそれを持たない人間だ。

結局自分にはない臓器のことなどわかることではないということか。

震えながら、霊薬を飲む迅雷。

彼も当然忍者として、それを常備している。玉が潰れていればそれで一瞬にして治る。

そして一日の間は事実上外傷で死ぬことはない。

が……

霊薬は痛みには何の助けにもならない。

「ふんぐうううう」

股間を抑え、悶える迅雷。

——ひ、ひどいよ……こんなところ思いきり握って……女の人だからわからないんだ……ああ、ずるい。周りの女の子たちも平気でここ狙ってくるし……女って怖いよ。そしてずるい、自分だけ玉蹴って、蹴り返されないなんて……さっきも握り返せて、玉がないのをいいことに……

膝を締め、股間を抑え、丸くなつてのたうつ迅雷。

彼の内心は、多くの忍者たちが一度は考えたことだろう。

忍者のほうがかくノ一より明らかに強いが、くノ一らは金的を集中攻撃してくるので戦うと割と忍者のほう股間を抑えて転がる場合が多い。

先ほどのくノ一、浮雲もそうだ。体術でも忍術でも明らかにもう迅雷のほうが強い。天才忍者疾風の弟の名に恥じない腕である。

ただ、急所を突かれてしまうと今の通りだ。

しばらく転がってから、何とか立ち上がる。

「ぐううう、お、お頭のところに行かないと……」

内またで歩く。いや、歩けない。

内股だと玉が刺激される。

かといって大股で歩いて、金的蹴りでも食らったらという恐怖はある。

いきなり蹴られる理由もないが、あまりの痛さに意味もないことを心配してしまう。

結果、半端な足の開き方でふらふらと歩く。

何とか四の屋敷にたどり着く。

「奥の部屋……迅雷、玉やられたのか？」

「や、やられました……」

見張りの中忍は三十少しの男である。うわ、と我がことのようにうめき声を上げる。

彼もさんざん金的をやられてきた口だ。敵味方のくノ一たちに。

百玉は潰されてきた、多くの忍者がそうであるように。

チラ、と周りを見る中忍。

「迅雷……俺思ってるんだ、疾風とお前が、俺たちの希望じゃないかって」

「希望？」

「どっちかが頭になってくれれば……ほら、せめて訓練ではさ……玉潰しは無しにできるんじゃないかって」

「そ、そうかな……」

——僕だって無くせるなら無くしたい。でも訓練で金的無しにしたら、外のくノ一と戦う時にもっと玉潰し食らいやすくなるような……

「女どもは汚ねえんだよ！ 玉ばっかり狙って……敵でも、同じ男忍者なら玉はお互い無しにするぞ？ なのに女ときたら敵はもちろん、仲間でも訓練の時なんかボコボコ蹴ってきやがって……腐れマ○コどもが……でもこれいうと、訓練で金的無しにしたら敵にやられるとか屁理屈言うからな……やっぱ女って馬鹿だわい」

忍者とは思えない口の軽い中忍。

そういうあり方は命取りではないだろうか。

と、その中忍の陰が伸びる。音もなく上にのび、それが人の形を作り、胸の辺りがこれ見よがしに膨らむ。

それにすっと色がつくと、爆乳美女が姿を見せる。

影を使う忍術で移動してきたのだ。



影華という上忍であり、「世話役」という最高幹部の女。それが心から楽しそうな笑顔を見せつつ、足を振りかぶる。そして、パンと軽い音を立てて後ろから中忍の太ももの間を跳ね上げる。ぐにゅ、と遥か年下の迅雷よりかなりボリュームで劣るが、並から見れば大きめの男の肉塊が女の爪先に持ち上げられる。

はいタ〇キン潰れた。今日からくノーね

ぐりぐりと、蹴り上げた爪先で男の部分を磨り潰す影から出てきた爆乳女。

影華という上忍であり、「世話役」という最高幹部の女。

それが心から楽しそうな笑顔を見せつつ、足を振りかぶる。

そして、パンと軽い音を立てて後ろから中忍の太ももの間を跳ね上げる。

ぐにゅ、と遙か年下の迅雷よりかなりボリュームで劣るが、並から見れば大きめの男の肉塊が女の爪先に持ち上げられる。

「はいタ○キン潰れた。今日からくノーね」

ぐりぐりと、蹴り上げた爪先で男の部分の磨り潰す影から出てきた爆乳女。

——この感じだと潰れてないけど、玉蹴ったらとりあえず「女になったね」っていうのは基本よね。足を下げる女。

口をしゃちほこばらせ、つま先立ちになる中忍。

一瞬黙っていた中忍だが、足を下げられるとわずかながら余裕ができたのか、うめく。

「ほぐううっ！」

「あはは！ 「ほぐうう！」 だって！ 金的食らった男の声ってなんでこう面白いの？」

痛々しい声にもただ笑うだけの爆乳女。

その場に転がり、股間を抑えて転がる中忍。先ほどの迅雷と同じ格好になる。

真っ青になり、震える迅雷。

蹴った女は知り合いである。

しかしだから「自分は安全」とはとても思えなかった。中忍も多分その女とは知り合いだっただろうから。

「うわ……な、なんで……」

「なんでって、里の方針を批判してるから制裁よ。ううふふ、迅雷も気を付けないと。タマタマ潰されちゃうよ？」

「は、はいっ！」

「あはは、そんな股間防御しないでも、今すぐって話じゃないから！ っていうか、岩戸、そんなに痛い？ 軽く蹴っただけなのに。っていうか後ろから金的なんてほとんど威力ないよ？ タマタマってマジ弱いよねー。男って修行する意味ある？ タ○キンやられたらおしまいじゃない、いくら強くても。その点私たち女の子様は……」

パンパンと、派手な着物の前を叩いて見せる。

思わず膝を締める迅雷。

「うふふ、男は今みたいなことは一生できないね。タマタマが痛すぎるもんね。怖くて無理。うふふ、天才だなんだ言っても、金的やられないように女の子の格好したりするのが男ってもんよ……まあそれはいいとして」

迅雷の兄、疾風が女の格好をしていることには批判があった、主に男からで「女の格好などして」という女性蔑視風物がほとんどでくノーらに叩き潰された。

が、くノーらからも多少の批判はある。

その急先鋒がこの影華である。

影華は疾風に憧れていた、付き合ったこともある。そんな相手が女の格好などしているのが彼女には耐えがたかった。かわいいからいい、という女もいるだろうが、彼女は気に入らないタイプだったのだ。

かといってもう別れているので「好きな人にああいう格好はして欲しくない」とも言えず、屈折し

た形になる。

そんな細かいことはわからない、疾風や影華の半分の年齢の迅雷は眉をしかめるが、影華の目が向けられると中途半端な顔をする。

大まかには、笑っているような顔。

自分も金的を蹴られては文字通りたまらない。

「迅雷、お頭がお待ちよ。初任務になるわね」

——どういう顔してるのこの子……自分も金的やられるかも、ってビビってこの顔？ 男ってマジでキ○タマだけはどうしようもないのね。受けるわ。っていうか、私女でよかった。

「どういう任務ですか？」

「おんぐおおおおおおお」

うめいたのはもちろん影華ではない。彼女に一番弱いところを蹴り上げられ、転がっている男だった。

その声を聴いて、あまりの苦痛に満ちた呻きに、さすがに影華は顔色を曇らせる。

……というようなことは全くなかった。

「ぶっ、やりすぎたかな？ ぶぶっ……でも本当に結構軽く蹴ったんだけど？」

頬を赤らめて嘔き出しつつ、ちらちらと振り返る。

——まあ本当に軽かったから。すぐ復帰するでしょ。平気平気。多分。全然わかんないけど、多分行けるっしょ。それよりこの子をお頭のところに連れて行くほうが先決だね。

うめく見張りを置いて、奥の間に進む二人。

——いま敵が来たらどうするんだろう？

まあ、来るような場所ではないし、見張りも見える場所にだけいるわけではないので平気ではある。

陰から急に現れた女に金的を蹴り上げられた岩戸は平気どころではないが。

「任務ね。お頭と相談したから知ってるんだけど。勝手に言うわけにもいかないから直接聞いてもらうわ」

ぶるぶると、爆乳をゆすりつつ歩く。爆乳だが、垂れることなく、重力に逆らうようにむしろ乳首など上に向かってついているように見えた。

——す、すごいおっぱい。

唾をのむ。

股間が反応しないように関係ないことを考える。

目が泳ぐ姿に、年上女性の影華は当然気づく。

——おお、この子も色気づく年齢なんだ。この子もいずれ疾風みたいな化け物クラスのデカチ○ポになるのかな？ ほかの人と付き合ったらみんな粗チンに見えてははじめは驚いたわ。でもほかの人が普通で、疾風のがデカすぎるのよね。アレ絶対一尺三寸（約四〇センチ）はあったわ。私のオッパイから余裕で先っぽ出たもんね。あんなもんぶら下げて「女の子でござい」って無理ありませんでしょ？

「あの……影華さん」

「オッパイ見てるでしょ？」

「み、見てません」

「あらあら、男の子の部分隠して……もしかして、大きくなっちゃった？」

年上女性に「オッパイ云々」という話から金握りに移行された記憶が生々しい迅雷は、つい股間を防御していた。

そうとは知らない影華は勃起隠しと見たのだった。

「か、影を使う忍術って珍しいですよね」

「大体四元素だもんね。地水火風と。それに身体強化系。うふふ、身体強化でタマタマ強化すれば岩戸もあんならなかったかもしれないわね。うふふ、迅雷も大事なところ身体強化で守ったら？」

「む、無理ですよ……だって体を強くするのは元の強度を上げるわけで……」

「うふふ、そうよねー！ キャン玉はもともとが弱すぎて、身体強化する意味ないもんね！ 百倍にしても女のここより絶対弱そうだし！ それなら別の術身に着けたほうが絶対いいわ！」

腹を抑え、ゲラゲラ笑う影華。押さえた自分の股間と、迅雷の股間を見比べてさらに笑う。

「そういえばこういうことあったのよ。敵の忍者とね、手と手をこうやって組み合って、互角の形になっちゃったのよ。でもよく考えたら……股間をこうぶつけりゃ私は平気だけど相手はタマタマがやばいじゃない？ 全然互角じゃなかったってわけ！ そいつかなり強かったけど、股間を股間にぶつけたら「おぐうっ！」って一発で力抜けちゃって、そのあとはとどめのタ○キン蹴りで二個玉潰して終了。大変よね、そんな狙われやすいところに急所ぶら下げてる人たちは」

顔を真っ赤にしたり真っ青にしたりしつつ、とにかく歩く迅雷。

女ごころなどかけらもわからない迅雷だが、影の忍術について何か聞けそうにないことだけはわかる。

かなり曲がりくねった廊下を通り、奥の部屋に入る。

最年少で中忍となった天才忍者の迅雷には隠れている護衛の中忍らの存在が感じられた。

畳の部屋に五人の人間が座っている。

真ん中の一人、三〇少しの女がお頭、この里の頭領だった。

影華も爆乳だが、年齢とともに蓄えられた脂肪のおかげで頭領の女のふくらみは一段階二段階巨大で、とても忍びの頭領として素早く動けそうな感じはしない。

しかし数か月前にも、交渉した他の里の頭領がそんな体で素早く動けるのかと嘲ったのに対し、瞬時に陰囊を掴んで見せた。腕利きの忍びである。

同時に、無礼のお詫びにと半ば強引にその頭領を食ってしまうエロ熟女でもあった——「金握りのお詫び」ではなく、「お詫びするためにあえて金握りした」のではないかと部下が疑うほどである。

実際のところ、彼女が交渉を持った忍びの里のう頭領のなかで男は大体は彼女を通した穴兄弟である。

そんなエロ熟女が、慈母のような表情をショタ忍迅雷に向ける。

——疾風ちゃんの弟ね。うふふ、もうアソコ、大きいのかしら？ おチ○ポ、大きいのかしら？ 疾風ちゃんもお父さん（頭領の父ではなく疾風と迅雷の父ということ）も大きかったもんね。巨根の家系なのね。デカチンチ○の……ん、よく見たら今まも前結構膨らんでるわ。うーん、うまく前見せてもらう方法ないかしら。あ、そうだわ、「見せろ」って命令しちゃえばいいのよ、私頭領だし！ じゃ、さっそく言っちゃおう！ チ○コ見せろ！ デカくて立派な男のシンボル見せろ！……って、もちろんそんなセクハラおばちゃんじゃドン引きされるからできないわね。

表情からはうかがい知れないことを考えつつ、部下の一人を見る。

周りの四人はみな上忍で、「相談役」だ。

四〇ぐらいから二〇少しまで、女ばかりだった。

別に女だけ近くに置いているわけでも、相談役にしているわけでもない。

男の相談役はみな彼女の性的なちょっかいに耐え兼ね、外での任務を志願して出て行っているのだった。

その中には迅雷たちの父親も含まれる。

既婚者でも平気で手を出す彼女の近くにいると家庭にヒビが入るので仕方ない選択といえた。

彼女は内面はまだしも、見た目的には相当な美人でスタイルもいいのでいくら「やってない」といっても妻たちは平静ではられない。

相談役の一人が、懐から書状を出す。

「はいこれ、迅雷ちゃん」

「はい、確かに」

小さい村なので、天才忍者などと呼ばれて目立っていれば皆に名前を知られている。

——っていかさっきのおばちゃんも、頭領もこの人もみんな「ちゃん」か……もう中忍なのに。影華さんは違うけど。子ども扱いして……

実際ショタ忍者なのだから仕方ない。

「今回の任務はそれを朝倉殿にお届けすることよ」

うさぎ隠れの里は京の南の山岳地帯にある。というと外国の険しい土地を想像するが、そこまでのことはない。山の中に隠れている感じか。

朝倉氏が本拠とする土地は一乗谷という山に囲まれた平地で、京から結構北のほうにある。

上手くすれば一週間ほど歩けばつくだろうか。

うさぎ隠れの里から京都までは三日ぐらいなので、行き帰りで三週間ぐらい。

忍びとして各地の地理と大名の概略を叩き込まれている迅雷は朝倉といわれれば経路まで頭に浮かぶ。

黒坂という忍びが朝倉家の当主である猫景の元にいると語る頭領。黒坂と会うための手筈も教えてくれる。事情を説明すれば猫景に取り次いでくれるのだという。

「今回が初任務ね。初体験ってわけ……うふ。サポートつけてあげるから、頑張るのよ」

やれるか？ などと聞くことはない。やれると思うから命じるのだし、忍びが「いやその任務は気が進みませんわ」などと言えるわけがないのだ。

書状は油紙に包まれ、紙で包まれ、さらに油紙で包まれて紐で縛られている。

本当に中に書状があるのかすらわからない。

忍術で封じられ、透視系の忍術で中を見たり瞬間移動系で抜き出したりは難しい。封印した人間以上の力量があれば別だが、破られそうになれば焼けるように術がかかっている。その自爆が発動しないようにうまく破るには相当術者を上回る腕がなければならない。

封じるものと破るものは対等ではない。

文句を言うだけのほうが簡単であるように、壊すのは簡単でも元に戻すのは不可能に近いように、封じるものとそれを破るものには大きなハンデがある。

要は、力量が同じなら封じるほうが圧勝するのだ。

勝手に開けようとしても、中身は焼ける。

開けるにはあらかじめ封印者が預かっていた髪の毛と同じ遺伝情報を持つものが開かねばならない。

今回の場合、それはもちろん朝倉の大名ということになる。

こういって相当重要な書類のようだが、新米の初任務で運ばせる密書がそれほど重要なわけもない。

こういう密書の封じ方が一般的な世界というだけだ。

「頑張ります！」

「頼もしいわ」

——ちょ「頑張ります！」って！ それ忍者のセリフ？ かわいすぎるわ。食べちゃいたい。任務

に成功したらご褒美に……でも、さすがに三分の一以下の年齢の子だとみんなの目がヤバいかしら…
…

すでに十分以上にヤバいことには無頓着な頭領。

と、その顔が少し曇る。

——というか、アソコが本番可能かが一番の問題よね。

どう考えても倫理が一番の問題ではないだろうか。

そんな頭領の思惑など知らず、意気揚々と屋敷を出る。

忍びの任務はすべて極秘である。兄に「ちょっと朝倉さんとこ行ってくる」などとは言えない。

黙って出発するだけのことだ。

路銀などは密書とともに渡され、身一つで出られる。

金などなくとも、カラスでも蛇でも捕って自活するのが忍びであるし。

と、興奮気味の迅雷の表情が曇る。

後ろから、三人の小柄な少女がついてきていた。

迅雷と同じ年ごろか、少し下のロリたち。

この里にいるからにはくノ一である。

「な、なんだよ？ 何か用かよ？」

「なんだよ？」

「うわあ、出世したねえ迅雷！ もう中忍だもんね！」

「中忍さまのタマタマがどのぐらい強くなったのか試してあげようか？」

「いいですね……」

「ひっ」

股間を押さえ、慌てて歯を見せ愛想笑いをする迅雷。

「いや、月星陽（つきほしひ）のみんな、どうしたのかな？ 何か用かな？」

月・星・陽（ひ）、そういうシンプルな名前の三人娘。

ショートカットの金髪で大人っぽく、落ち着いた感じの月。

おかつぱの緑色の髪でおっとりした感じの星。

そしてショートボブとでもいうべきふわとした髪型の、赤い髪で吊り目の気の強そうな陽。

「あら、冗談ですよ迅雷。今日から大切な任務ですものね。いつもみたいな訓練はとりあえず無しにしておきますよ」

訓練。

この三人ロリ娘に訓練名目で玉潰しを食らった同年輩の忍者は多い。

というか、全員だ。

金的責めの恐怖で同年輩の忍者を支配し、頂点に自分たち三人組を、次に同じように金的で男たちを脅すロリくノ一たちを、そして最下層にショタ忍者たちを……という過酷なヒエラルキーをこの里の中に築き上げた暴君たち。

大人から見ればかわいい争いだが、圧政を布かれる方としては間違いなく暴君そのものなのだ。

多くのショタ忍者が彼女らに挑み、金的を蹴られて敗れ去ってきた。

それは天才忍者と呼ばれる迅雷でも例外ではない。

あらゆる要素で見て、明らかに彼のほうが強い。

それこそ三対一でも勝てるほど強いはずだ。

だが実際戦うと股間を抑えて転がるのは彼のほうだ——ほうだ、というか三人娘が股間を抑えて転がることはあり得ない話ではあるが、とにかく負けるのは彼だということだ。

この悪鬼たちと離れられるというのも、初任務の喜びを増していた。

と、迅雷が真っ青になる。

「あら、どうかしましたか？」

月。

「あははは！ 何かビビってるね！ 金ちゃん蹴られると思ってる？ 蹴ってあげようか？」

星。

「うーん、これは気づいたんじゃないかね？ この腐れキ○タマくんのサポートが、私たち三人の初任務だってことに」

迅雷は別に中忍になったから初任務を受けたわけではない、昇進と初任務が重なっただけだ。

とはいえ、初任務の者のサポートも初任務の者、というのは無茶な形だろう。

「お、おかしいよ！ 普通サポートはもっとベテランの人がつくはずだよ！」

「まあ大した任務じゃないってことじゃないかな？」

「クソ任務！」

「まあ星は言い過ぎですけど……私も大した話だとは思えませんわ。朝倉家は今のところどこも戦争してませんし……お使い任務じゃないですか」

だから、一気に四人に「初任務」をこなさせようということか。

舌打ちしそうになる迅雷。

しかし実際にやると金的蹴りが来そうなので抑える。

来そうと言うか、絶対来る。

表面では抑えつつも、内心では不満たらたらだった。

——なんだよ冗談じゃないよ。こいつら僕より年下だし、下忍じゃん下忍。まあ大人でも下忍の人はいるから別に悪くはないけど……

下忍のほうがむしろ多数派なので、大人の下忍が迅雷を見ても「自分のほうが年上なのに下忍」と考えるよりも「中忍になれるのはエリート」と考える者のほうが多いだろう。

まあそれでも多少思うことはあるかもしれない。

が、そんなことに思いをはせるほどショタ忍者迅雷は大人ではなかった。

とにかく月星陽の三人組の機嫌を損ねず、かかわりを減らしたい。

慎重に言葉を選びつつ話し始める。

「ぼ、僕一人で十分だよ。ね？ 君らに負担はかけられない……はうっ！」

「玉っ！」

パン、と太ももを掌で叩く陽。

「おおおお」

股間を引く迅雷。

金的を食らったわけではないが、「玉」と叫ばれて近くを叩かれればもう精神的には食らったも同然だ。

それに踏み込み、浴衣のような着物の胸倉を掴む陽。

「ヘタな言い訳してんじゃねー。私らが気に入くないんでしょ。っていうか、今の叩いてないから」

「しょ、衝撃で……おぐっ！」

ゴリ、と膝蹴り。今度は股間を抑えている手を。手ごしの膝金蹴り。

「おああああああ……」

陰囊が今更ながら極限まで縮み、急所を守ろうとするが遅すぎる。

吐き気と発汗、痛みで気が遠くなる迅雷。

——キ○タマがあああああ女なんてクソだよおお。キ○タマもないからこんなことができるんだ、クソ、クソっ！

「何が衝撃だよおお。男は一々大げさなんだよ！」

「ひぐううう」

腰を引いてうめく迅雷。その手ごしに陰囊を磨り潰そうとするかのように、陽がゴリゴリと膝を押し付けて動かし続ける。

「そんなに本気じゃないし、手の上からだから平気でしょ？ 敵のくノ一なら本気でキ○タマ潰しに来るよ？」

「本番に備えよう！ キ○タマ潰しちゃえ！」

「そうですわね、星の言う通り。というか、迅雷のタマタマはまだ潰したことはありませんでしたわね？ うふふ、そのせいで生意気なのかも……ならここでいっそ初体験」

「いやだあああ！」

逃げようとする。が、後ろにいつの間にか月と星がついていた。

前はゴリゴリと膝で陰囊を磨り潰そうとする陽。完全に囲まれていた。

「うわっ……」

手。印を結び、変わり身の術で瞬間移動しようとする。

が、手で股間を守っている状態でそれは無理だ。

——は、放すんだ。一瞬で玉磨り潰すなんて無理だ。むしろゴリゴリしてる方がこっちとしては有利だよ。膝蹴りの連打じゃ、防御しないわけにはいかないんだから。だから放して……

放して、印を結ぶ。

……などということは、とても男の身では無理だった。

急所を攻撃されているのに、その防御を引き上げるなど。

「おらおらおら、術使って逃げるなり反撃するなりしたら？ 玉防御やめて、印結んでさー」

幼くとも金的に慣れた陽は、手を引き上げて術を使うなど不可能なことがわかっていながらそんなことを言いつつ、満面の笑みを浮かべる。

「ぐううう、あつ、ちょ……」

悔しがる迅雷。が、そんな時間はなかったとすぐに理解させられる。

「はい右手ゲット！」

「左手ゲットですわ」

悩んでいるすきに、脇の下に、二人のロリにそれぞれ腕を抑えられる。

そして、前に立つ陽が親指と人差し指で丸を作る。両手で作って、それを握って潰すような形をし

てみせる。

「そして金ちゃん二個ともゲットと」

「は、はひ……も、もう十分ですから」

震える。



男の急所がいかにか致命的で脆弱で、しかしあっさり治るので何の遠慮もなく攻撃していいか、その話を聞いた時の感動を三人は鮮明に覚えていた。

当然のように、同年輩のくノ一の中では誰よりも早く三人は玉潰しを経験し、それからその分野ではトップを走って今に至る。

いつの間にか、周りに人だかりができていた。

月星陽の仲間というか同年輩のロリ忍者たち。

「いいぞー！ やっちゃえ！」

「中忍野郎のキ〇タマ潰せ！」

「くノ一にしちゃおうよ！」

「男ってだけで威張ってさ！」

「う、うそだっ！ 僕らはいつもお前らに……おおおおお！」

「女の子様にお前らと申したか！？ 去勢しかないね！」

「許してくださいいいいいいい！」

「みんなも順番に金的蹴りして！」

「よーしそう来なくちゃ！」

「タマタマはひとつ残らず潰れる！」

「おぐううう！」

「おぐううう、だって！」

「キ〇タマ蹴られた男って面白いよね！」

「痛い？ 痛い？ 私ならあんなの全然だな」

「私でも平気だよ」

「男忍者なんている意味なくない？ タマタマに一発で終わりなんだから」

「まあ男忍者がいないと、キ〇タマ蹴る楽しみもなくなるし」

「あは、そりゃ言えてるね！」

「やめてくれおおお！ はんぐううう！」

その後、ロリたちが飽きるまで金的を蹴りまくられ、最後には「女の子様には逆らいません」と土下座することになる迅雷だった。

そういう目に合う理由は何もなかった気がするが、ドSロリたちのスイッチが入ってしまっているのは、そうする以外に収める方法はないのだった。

ちなみに彼の睾丸は相当巨大で、ロリたちの力が弱いこともあり、何とか潰れることはなかった。

潰れても治るとはいえ、それは幸運だったといえるだろう。

まあ悶絶死しないのが不思議なほど金的を蹴られまくって「幸運」もないが。

ちなみに、迅雷が月星陽に玉責めを食らい始めた時点で、周囲にはロリくのいちとともにショタ忍者もいた。が、ショタ忍者らは自らの玉を守るために蜘蛛の子を散らすように逃げ出していた。

別に迅雷が嫌われているわけではない、むしろ好かれている。

しかしそれでも自分が金的の危険を冒してまで、助けようというものは一人もいないのだった。

まあ助けられないから蹴られ損、ということもある。

そういう頼りないショタ忍者がサポートにつくよりは、月星陽の三人のほうが多分頼りになるだろう。

が、彼女らに助けられないようにうまく任務をこなそうと、金的の痛みを抑え、ロリたちに土下座しつつ誓う天才忍者迅雷だった。

体験版終わり

この後天才忍者迅雷に更なる女難。

金責めと、巨根に欲情した年上女性の逆レイプの嵐。

続きは製品版でお楽しみください